

かつて携わった建造物⑳-⑱ 競輪場と競艇場

日本全国で競輪場は43場あり、競艇場は24場あるそうです。

今回は、その中で当社が関わりを持った競輪場と競艇場の施設を挙げてみました。

競技場ではスタンドの鉄骨を手がけることが多いのですが、“スタンド”とは「競技場などにある階段式の観覧席」を指します。

また、舟（ボート）で順位を競うレースの呼び名は、1997年より「競艇」に統一されていましたが、2010年以降は“ボートレース”に呼称が統一されています。

取手競輪場メインスタンド

場所：茨城県取手市白山

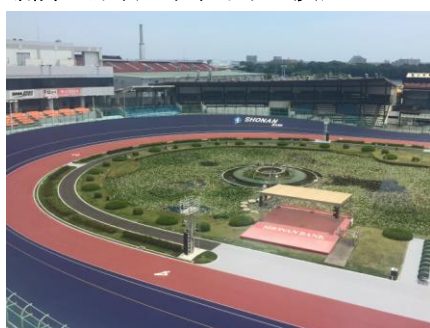


かつては“取手競馬場”として競馬を開催していましたが、昭和20年代の競輪ブームに乗り、当社は1945年（昭和25年）の競輪場への“鞍替え”開場に合わせて造られたメインスタンドを手がけました。

施設の老朽化と東日本大震災での被災の影響で、残念ながら2012年に取り壊されました。

平塚競輪場

場所：神奈川県平塚市久領堤



1950年（昭和25年）、開場。イメージ戦略やイベントなどで、若者や家族連れが多いのが特徴です。他の施設に先駆けて実施した企画が多く、選手名を印刷したマルチユニット券や重賞式のチャリットの発売も、この競輪場が発祥です。

当社は、1987年（昭和62年）にバックスタンド改修を手がけました。

岸和田競輪場

場所：大阪府岸和田市春木若松町



1951年（昭和26年）、開場。通称として「浪切りバンク」と呼ばれている競輪日本選手権なども開催される立派な競輪場です。近年は積極的にGIレースを開催していて、2014年には西日本初となる“KEIRINグランプリ”を開催しました。

当社は、1987年（昭和62年）にメインスタンドの建替工事を手掛けました。

松戸競輪場

場所：千葉県松戸市上本郷



1950年（昭和25年）、開場。地理的に東京都心から近いこともあり、川崎競輪場に次ぐ集客力を誇ります。特徴は、最寄駅から近いこと（常磐線の北松戸駅下車、徒歩5分ほど）、そしてナイター競輪であることです。当社は、1993年（平成5年）にメインスタンドの改築工事を手がけました。

相模湖漕艇場

場所：神奈川県相模原市緑区与瀬

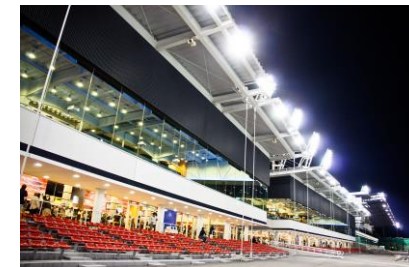


1963年（昭和38年）、開場。1963年（昭和38年）、開場。翌年の東京オリンピックではカヌー会場となり、その後もボート競技のメッカとして各種の大会が開催されるなど、半世紀にわたって活躍しています。

当社は、1962年（昭和37年）に建物の地下1階にある艇庫（ボート格納倉庫）に携わりました。

桐生競艇場

場所：群馬県みどり市笠懸町



1956年（昭和31年）、開場。日本最北にあるボートレース場です。

また、日本の競艇場として初めてナイター競走を開催した競艇場として知られています。

当社は、1981年（昭和56年）にメインスタンドを手がけました。

平和島競艇場（ボートレース平和島）

場所：東京都大田区平和島



1954年（昭和29年）、開場。東京都内にある3大ボートレース場（平和島・多摩川・江戸川）の中で、最大の売上高があります。

競艇場の全国的なメッカは住之江競艇場ですが、平和島競艇場は東のメッカと呼ばれています。

当社は、1998年（平成10年）にセンター棟を手がけました。

蒲郡競艇場

場所：愛知県蒲郡市竹谷町太田新田



1955年（昭和30年）、開場。2006年より全レースをナイター競走にしたことにより、年間売り上げで長らく首位を維持していた住之江競艇場を抜いてトップに立ち、現在も年間売り上げの上位を保持しています。

日本の全レース場の中でコース幅が最も広いことが、この競艇場の特徴となっています。

【作成裏話】

社内報の裏ページが寂しく物足りないということで、私が社内報の編集をするようになった5年ほど前からコラム『かつて携わった建造物』の連載を始めました。

当初の予想をよい意味で裏切って長期間にわたって連載することができました。

このコラムを2020年10月号に掲載し、連載回数が切りがよい20回目を迎えて連載を終える予定でしたが、新型コロナウイルスの所為で2020年7月号が発行中止になってしまい、この計画は頓挫してしまいました。

7月号に掲載予定であったものを含めて3回分ほど作成済みのものがありましたので、この掲載に先立って“番外編”として「鋼和会」のホームページに掲載させていただきました。

このコラムを作成していて、当社のメイン工場である取手工場（茨城県取手市）で橋梁の立会検査を計画する場合は、取手駅でタクシーを捕まえることが難しいので、取手競輪場の開催予定日を避けてスケジュールを組んだことを思い出しました。

“取手競輪場”以外にも複数の競輪場に当社が携わっているのがわかったので、このコラムを企画したのですが、数が足りなくて半ページ分しか埋まりませんでした。

折角の企画なのでボツにするのは忍びなく、競艇場との「抱き合わせ企画」としました。

(塚本 慎一)

